

森英恵追悼

マダム・バタフライ、
50年前の笑顔





アトリエの中央で実力をたたき立てる高橋。四十六歳。小社発行の「文藝春秋」一九七二年六月号の巻頭グラビア「日本の顔」を飾った際の一枚だ。

「日本のデザイナーが国際的に通用するための身分保証」になる仕事をした。」

その記事の中で語っている通り、三十九歳の時からニューヨークで活躍。憧れのモチーフで注目を集め、「マダム・バタフライ」と称された。一九七七年にはアジア人として初めてパリ・オートクチュール展合に加盟。一九九六年に文化勲章を受章し、その後も今年の十一月に九十六歳で逝去するまで、ファッション界を牽引し続けた。

服飾史家の中野香織氏は「エレガン



スの大半でありながら、志にはタフな反骨精神があった」とを分析する。

「海外へ進出された一九六〇年代は、今とは比べ物にならないほど、日本人履装が根強い時代です。日本の百貨店でも、パリのデザイナーには遠く及ばない」と頃の売り場に溢いやられる始末。実力主義のニューヨークで結果を出してやる、世界に認めさせてやる」と態度を絶やしたのでしょうか。「開拓的

深くへまはその救い方だという。

「山本寛斎さんや高田賢三さんは欧米彼や浴衣地をヒントに、アヴァンギャルドで突った日本らしさを打ち出しました。対して麻さんは東洋と西洋の工夫センスをなめらかに融合させている。」

代表作「夏のバジヤマ・ドレス」はガウンの袖を動物風のスリットにアレンジしたもので、和の花を染め抜いた上質なシルクで仕立てていました。正統派のエレガンスで異つ向から世界に挑み、堂々と勝ち続けた日本人は他にいません。(同前)

海を越えて羽ばたいた彼女は、母国のデザイナーに勇気を与え、モード先進国だった日本を、「お洒落の喜び」に目覚めさせた。

二〇一〇年に上梓した自伝「ワットバイ バタフライ」へ小社発行を彼女はこの結んでいる。「デザイナーという人生を歩んで、私は幸せだった。」

編集 高橋香織